



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	「梅花歌三十二首」試論
Author(s)	吉川 貫一 (Yoshikawa, Kanichi)
<i>Citation</i>	文林 (BUNRIN), No.3 : 91-111
Issue Date	1969
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## 「梅花歌三十二首」試論

吉 川 貫 一

大化以後、飛鳥、藤原時代既に「文学のあそび」が胚胎し、天平期に入ると文学的座興として宴席における古歌の誦詠、あるいは即興的作歌が興隆してくる。これは北山茂夫氏が「ヤマト朝廷を形づくる集団の内部に『あそび』への欲求がたかまり、未開の素朴な歌謡または舞がその本来の機能を弱めて、宮廷儀礼の方向に様式化されたことは、六世紀の前後の『ますらを』の主体の著しい変貌であった」と指摘される社会的現象と無縁のものではなかったはずである。さらにそれは中国大陆から流入した「風流」の思潮の影響も大きな力となっていることが考えられる。こうした古歌の誦詠、あるいは即興的作歌の、態度や場を万葉集における「ますらを」たちは「風流」すなわち「みやび」と理解し体験したのである。「ますらを」とは七、八世紀前後の貴族、官僚を指称したものであることは言うまでもない。これらの貴族、官僚たちの自負と教養が、中国から流入されて来る「風流」を日本風に「みやび」として受けとめる際に、石川女郎と大伴宿祢田主との贈答歌（二・二六―二七）にみられるような「文選」または「玉台新詠」的な好色めいた「風流」とは違った「品格」、「儀表態度」「自為一派」といった「風流」を「みやび」として受けとめたのである。即ち万葉集中における「風流」<sup>みやび</sup>の概念は、案外「文選」や「遊仙窟」的好色めいた「みやび」の要素はすくなく、どちらかというところ超俗的な、または精神的気高き、時には官能的な匂は含まれているとしても、文雅な遊びを理解する雅趣といった要素を多分

にもついたのである。このことについては既に神戸大学教育学部研究集録第三十三集「万葉集における『みやび』について」において考察を試みているので、ここで詳細に説くことは避ける。

さてこういった「みやび」を基底にした「文学のあそび」の場には、さきにも触れたように万葉集の中において二通りのゆき方が現れる。一つは「あそび」の場において古歌を誦詠することである。古い伝統を継承し、古歌の律調を現代の生活に合わせながら活かしてゆこうとする態度である。

（天平八年）冬十二月十二日に、歌舞所の諸王臣子等の、葛井連広成の家に集ひて宴する歌二首

此来古舞盛に興りて、古歳漸く晚れぬ。理共に古情を尽して、同に古歌を唱ふべし。故此の趣に擬へて、轍ち古曲二節を献る。風流意氣の士、儼し此の集の中にあらば、争ひて念を発し、心心に古体に和せよ

わが屋戸の梅咲きたりと告げやらば来ちふに似たり散りぬともよし（六・一〇一一）

春さらばををりにををり鶯の鳴くわが山芥ぞやまず通はせ（一〇一二）

この題詞によれば、古舞の興隆に刺激されて、大いに古歌を誦詠し、古歌を自分たちの生活の抑揚の中に活かそうとするもので、それを成し遂げてゆこうとする者が、「風流意氣の士」であったわけである。あるいはまた、

（天平十九年）四月二十六日掾大伴宿称地主の館にして、税帳使守大伴宿称家持に餞する宴の歌。古歌を併せて四首

玉梓の道に出で立ち別れなば見ぬ日さまねみ恋しけむかも

一に云はく、見ぬ日  
久しみ恋しけむかも（一七・三九九五）

右の一首は大伴宿称家持作れり

わが背子が国へましなば霍公鳥鳴かむ五月はさぶしけむかも（三九九六）

右の一首は介内蔵忌寸繩麿作れり

吾なしとな佗びわが背子霍公鳥鳴かむ五月は珠を貫かさね（三九九七）

右の一首は守大伴宿祢家持の和へなり

#### 石川朝臣水通の橘の歌一首

わが屋戸の花橘を花ごめに珠にぞ吾が貫く待たば苦しみ（三九九八）

右の一首は伝へ誦めるひとは、主人大伴宿祢地主なりとしか云ふ

この一連の歌は、題詞、左注から考えて、前の三首はこの場での創作歌であるが、最後の一首は石川朝臣水道の歌で、当日の主人大伴地主が伝誦して来たものを誦詠して披露したものである。これは新しい創作歌と併せて、その場に相応する古歌を誦詠することが、その場の情緒を醸し出す「みやび」と考えられていたものと思われる。以上の例に対して二つには、宴席に多くの客を招き詩を賦すといった大陸文化を摂取しようとする文人意識をもった遊宴の歌である。万葉集におけるその顕著な例が巻五の「梅花歌三十二首并序」（八一五―八四六）の歌群である。天平二年正月十三日、大宰帥大伴旅人の館に三十二人の官僚歌人が集って梅の花見の宴が催された。この宴自体が大陸の詩宴を模したものであり、梅の花そのものも舶来のものであり、当時としてはまだ十分国民の生活の中に浸透していなかったと言われるところからみて、大伴旅人はじめ三十二名の歌人たちの胸には、時代の先端をゆく、異国趣味の理解者として、すなわち「みやびを」としての抱負と自負があったとみられよう。この一連の歌の序の中の「詩に落梅の篇を紀す。古今それ何ぞ異ならむ。宜しく園の梅を賦して、聊か短詠を成すべし」とある文からみても、中国の古詩にも落梅の篇があるが、それに劣らず梅花の短歌を詠もうではないかという意気を感じとることができる。「古今何ぞ異ならむ」とはただ古と今との時代の間隔を述べただけで、大陸と大和という空間的な意識がない。意識がないというよりは、むしろ一体観のうちに同化しているものと

考えられる。また「後に追ひて和ふる梅の歌四首」(八四九―八五二)の中の

梅の花夢に語らく風流たる花と吾念ふ酒に浮べこそ(八五二)

この歌では夢に託して、「みやびたる花」と梅自身に語らしめているが、当時の文人たちの一般的通念として、梅の花は瀟洒たる雅趣に富んだ花と観じていたことを示すものであろう。その花を賞翫しながら遊宴の席で歌を詠むことが「みやび」の行為であり、文人意識の昂揚であったのである。

しかしこの雅宴が最初から雅宴を開かんがための目的のもとに、これらの人々が招集されたものであるかどうかについては、いろいろ論のあるところである。例えば藤原芳男氏は、この雅宴に遠隔地の大隅、薩摩の二国と、老岐、対島の国司らが臨席していることに注目し、当時現地における緊迫した政情を分析して、この詩宴が流行の風に乗じて管下の文雅官人を擢でて催した大伴旅人の詩宴のための詩宴と見るのは当を得ないとし「梅花の宴は多端な政務の間に催された一日の清遊であり、梅花の歌はこの集ひにあつては必然的にその座興から生じたものであつたと見る」という見解を提示しておられる。<sup>注2</sup>試みにこの宴の臨席者を役職的にみると、大宰府直属の役人は大貳卿以下竿師志氏大道に至る十六名。その他役目のない者、当時、資人であつたとも考えられる三名。別に観世音寺別当笠沙弥。配下の国司としては筑前守山上憶良以下対馬目高氏老に至る十一名である。もし風流の雅宴のみが最初からの目的であつたならば、直属の十六名と役目のない三名、笠沙弥と合わせて二十名でもこと足りることである。せいぜい招いたとしても筑前の守、介、掾、目といったところであろう。それにも拘らず憶良を含めて十一名の国司が参加しているということ、殊に遠隔地の国司が参加しているということは、やはり最初の目的は政務に関する会合であり、その座興として催された雅宴とみる説が妥当と思う。だからといって、この梅花の宴が、文化的に文学史的に評価の変るものではない。座興として催されたこの雅宴に堪えら

れる官僚たちであったこと、遠隔地の役人たちも、旅人の指標する「みやび」に応え得る文人たちであったということに  
おいて、この宴のもつ意義はより大きいものと言い得よう。個人的にみても三十二首一連中壱岐目、村氏彼方の作に

春柳縊に折りし梅の花誰か浮べし盃の上に（八四〇）

という歌がある。ここの春柳は

春柳葛城山に発つ雲の立ちても坐ても妹をしぞ念ふ（一一・二四五三）

の例からみて枕詞とする説と、「吾は春柳を縊に折った。誰が盃に梅の花を浮べたか」と対句に解する説がある。<sup>注3</sup> いずれ  
にしても、この歌、および「後追和梅歌四首」中の「酒に浮べこそ」（八五二）の歌、または大伴坂上郎女の

酒杯に梅の花浮べ念ふどち飲みての後は散りぬともよし（八・一六五六）

などの同想の歌は、その発想が遊仙窟の「落花泛酒歌鳥鳴琴」によったものであることは諸注の説くところである。遠隔  
の島の四等官の歌も、表現の巧拙は別として、異国趣味の理解者として当時の文化人共通の想念の上になった、文化度の  
高い作品といえよう。この雅宴が、藤原芳男氏の説の通り政務の余暇に催されたものであったとしても、ここに集うた人  
たちは、旅人の指導のもとに

も、しきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここにつどへる（一〇・一八八三）

この歌のような、都会風の「みやびの遊び」を、ここ大宰府の地に試みようとしたものと考えられよう。このような背景  
をもつ、梅花歌三十二首について、試論的な考察を試みたい。

まず三十二首一連の歌は序によれば「園の梅」を詠む共通の目標があったわけである。この園を旅人官邸の「園の梅」

に絞るか、広く一般の「園の梅」とするか、従来その見解はまちまちである。三十二首の歌そのものにおいても、囑目の歌あり、連想、主情の歌あり、その点を非常にあいまいにしているのである。このことは結局、三十二首中

1 梅の花今咲けること散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも（八二六）

2 わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも（八二二）

3 梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも（八二四）

4 打靡く春の柳と吾が宿の梅の花をといかにかわかむ（八二六）

5 春の野に鳴くや鶯なつけむとわが家の園に梅が花咲く（八三七）

6 鶯の音聞くなべに梅の花吾家の園に咲きて散る見ゆ（八四一）

7 わが宿の梅の下枝に遊びつゝ鶯鳴くも散らまく惜しみ（八四二）

以上七首のわが家の園　吾が園　わが宿を旅人の官邸とするか、作者自身の家とするか、その解釈がまちまちに陥る結果を招来することになる。注釈書によって、全部官邸とするもの、全部作者自身の家とするもの、或はそれを折衷するものなど様々である。このことについて吉永登氏の詳しい調査があるので、<sup>注4</sup>それを借用すると次の通りである。但し(2)は旅人自身の作であるから官邸であることは当然である。

○ (1) から(7)まで全部作者の自宅とするもの。

口訳万葉集　万葉集全釈　万葉集全註釈　万葉集評釈（金子元臣）万葉集評釈（窪田空穂）日本古典文学大系本万葉集。  
○ (1) から(7)まで全部官邸とするもの。

万葉集総釈（森本治吉担当）　万葉集評釈（佐々木信綱）　万葉集私注

○ (1)のみ官邸とし他は全部作者の自宅とするもの。万葉集注釈（澤瀉博士）

○ なお吉永登氏自身は(1)のみを作者の自宅とし、他は全部官邸とする立場をとっておられる。

さらに同氏は万葉集評釈（金子元臣）が「蓋し歌序に『賦園梅』とある園梅は、広い意味に解すべきで、帥老自宅の差別なしに、園中の梅を詠すればよいのであった」といい、「賦園梅」を題詠と考える見解に対して、この歌序が「矚目の景を述べての後の『園の梅』であってみれば、これを一般の庭園の梅などと解する余地はないのである」と述べ、題詠とする見解を否定される。この説に賛意を表したい。吉田宜が旅人から（憶良とする説もある）梅花歌三十二首并序を贈られて、書簡とともに旅人に奉った「諸人の梅花の歌に和へ奉る一首」

おくれるて長恋せずはみ園生の梅の花にもならましものを（八六四）

この歌は大宰府官邸の雅宴に参加できなかった無念さを儀礼的に詠んだものであろうが、吉田宜自身はやはり序の中の「賦園梅」を意識におき「み園生の梅の花にもならましものを」と詠んだものと考えたい。そうだとすれば吉田宜は序の中の「賦園梅」を、やはり官邸の園の梅と解していたと考えられよう。園の梅を官邸の園と限定し、題詠を否定するとき、後に追和した歌においてすら「み園生」と詠んでいるのに、当日の列席者がわが家の園 わが園 わが宿とよむことは、いよいよ矛盾をはらむことになる。このことについて吉永氏は「賓客とお相伴、その違いが、おなじ『わが園』などということばを用いながら、あるいは作者自らの家の園をいったり、時には旅人官邸の庭園をいうことになったと考えたい」として、さきにあげた歌の(1)は主賓の少貳小野大夫の歌であるから「吾が家の園」を自分の家の園とし、他の(3)から(7)の歌はお相伴役の歌であるから、官邸の園とされるのである。<sup>注5</sup>このことについての私見は後に触れるが、暫く、万葉集私注に従って、わが家は「此の家」とする見解に従って論をすすめることとする。



この三十二首一連の配列順序についてはいろいろの説がある。例えば原田貞義氏は、三十二首の用字を克明に分析しての結果「これらの歌が、この配列通り、官位順に次々と誦詠されたということの何の論拠もない」と言われる。<sup>注6</sup>土居光知氏は「三十二首の歌はあらかじめ準備してきた歌を吟詠し優劣を判ずるのではなく、また各人が吟誦した歌を誰かが記録し、順序よく列べたものでもなく、順次に各人が一首の歌を作り、みづから書き、それを吟誦し、各の人は前歌との付け合いを考え、宴会そのものを楽しくしようということを目的とし、自分の歌を詠じたものと思われる」と述べておられる。<sup>注7</sup>万葉集の中で時代はやや降るが、

佐保川の水を塞き上げ植えし田を尼の作れる 刈れる早飯は独なるべし家持續ぐ (八・一六三五)

のような問答体連歌の発現もみられることであり、この三十二首が土居光知氏の言われるように、後世の連歌、連句におけるような厳格な付け合いの法則は認められないにしても、その意識のもとに歌が連ねられていったものとしても、何の不自然もないであろう。しかしここではさらに一步すすめて、三十二首が四首ずつ一群をなす八群から構成されるものと想定してみたいのである。その理由としては、さきにも述べたように、序において古い中国の詩の落梅の篇に対抗する意識というより、詩と短歌と同化せんとする意識のあったこと、(このことについては、後に詳しく触れる) 四句ずつ区切ってみるとき第三首目は前の二歌とちがった素材がよまれていること、以上のようなことから漢詩の絶句形式に倣って四首一連の形式をとり、厳格にはいえないとしても起承転結の法則を意識ににおいていたものと思ふることによるものである。しばらくそのことについて具体的に考察してみよう。

①正月たち春の来らばかくしこそ梅を招ぎつつ楽しき終へめ (八一五) 大貳紀卿

②梅の花今咲けると散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも (八一六) 少貳小野大夫

A ③ 梅の花咲きたる園の青柳は縋にすべくなりにけらずや (八一七)

小貳栗田大夫

④ 春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つゝや春日暮らさむ (八一八) 筑前守山上大夫

まず最初の四首をA群とする。①(八一五)は大貳紀卿の歌である。帥旅人につぐ官位のものとして主賓に据えられ、旅人に代つてこの遊宴で、梅の花を招いて楽さの限りを尽くそうと提唱している。それをうけて②(八一六)は、満開の梅の花を散らさずに、この家の園にあらしめようと、矚目の景を讚美したものである。③(八一七)は梅の花から、すでに芽を出して縋にするようになった青柳に眼を転じて矚目の景を歌っている。ここでは青柳が主題となっていて、歌の流れの上からみても、唐突の感じがするが、ここに明らかに前の起、承の二歌に対して、素材、構想の転回をねらったものと考えられる。④(八一八)の憶良の歌は、今日の華やかな遊宴を羨み、讚美する気持で四首の結びとしているものと考えられる。この歌の「見つつや」の「や」を反語とするか疑問とするか、旧くからの論のあるところであるが、吉永登氏の「自分の家では人も訪れることもなく独り見つつ春の長日を暮らすのであろうかと疑ってみせる時、それはそのまま旅人宴席への羨望となり讚美とならないであらうか」という説に従いたい。その裏面、今日は皆の者と楽しもうという気持が感じとられるのである。土居光知氏は「大宰府の豪華な庭園から離れ、わが家の前庭に一本咲き匂う梅の花、それを眺めて独り暮らす隠士の生活を歌う」とされる。そういった弱は感じられるが、ここではその隠士生活を讚美するものでなく、華やいだこの宴において、むしろそれを淋しがつている境地ではなからうか。一面この雅宴を謳歌して結びとしているのである。

① 世の中は恋繁しゑやかくしあらば梅の花にもならましものを (八一九) 豊後守大伴大夫

② 梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり (八二〇) 筑後守葛井大夫

B ③青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし (八二二)

笠沙弥

④吾が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも (八二三)

主人

B群①(八一九)の歌について土居光知氏は「憶良の心を感じとり、世の憂いや悩みを逃れ、清楚な梅の花になりたいというたう」と説くが、これも世を背くという強い気持よりも、「梅の花になりたい」というのは当時の風流を解する文人意識による観念的な発想であるように思う。さきに引用した吉田宜の歌にも「み園生の梅の花にもならましものを」とあり、卷二にも、

吾妹子に恋ひつゝあらずは秋芽子の咲きて散りぬる花にあらましを (二二〇)

弓削皇子

のような類想の歌のあるところからみても、怪い気持の即興的なものである。②(八二〇)になると、その清楚な花も今眼前には満開である。ここに集う人たちはその花を挿頭して遊ぼうと矚目の梅花を詠歌して興趣をもりたてている。前の歌が、やや個人的興味に陥っているのを受けて、再び矚目の景を詠い、今日の遊宴の本来の姿の立ちかえろうとしている。

③(八二二)になると梅だけではない、青柳もともにかざして酒を飲む刹那的な楽しみを歌っているが、ここに再び三首目に青柳が素材としてあらわれる。しかも一連中酒を飲む楽しさを直接に歌った最初のもので、新しい境地の転換をねらったものと思う。④(八二三)の歌は、前の「散りぬともよし」の句をうけて、落花を降る雪かと見たてて感興を深めている。散る花を雪と見紛うという発想は一連中にも(八三九)(八四四)の歌にもみえ、当時として既に類型化したものであろう。しかしこの旅人の歌は第二句で「梅の花散る」と言い切り、さらに紛々たる落花を雪かと疑うところに春興を感じ、結びの歌として調子もゆったりと落着きがあつて、さすが主人の貫禄を示すものといえよう。このAB二群で当日の主賓格に当る人たちと主人、旅人の連作は終る。C群以下はいわゆるお相伴役の人たちの連作に移ってゆく。

C

- ① 梅の花散らくはいつくしかすがにこの城の山に雪は零りつつ (八二三) 大監大伴氏百代
- ② 梅の花散らまく惜しみ吾が園の竹の林に鶯鳴くも (八二四) 小監阿氏奥島
- ③ 梅の花咲きたる園の青柳を覆にしつゝ遊び暮さな (八二五) 小監士氏百村
- ④ うち靡く春の柳と吾がやどの梅の花をといかにかわかむ (八二六) 大典史氏大原

C群①(八二三)は前の旅人の歌に唱和する気持で、B群に接続する。「天より雪のながれるかも」と言ったに對し、それはどこのことであろう。此処から見える城の山には雪が降っているといったので、旅人の巧みな譬喩に對し、眼前の真実を歌っているところに興味があるのである。②(八二四)は「梅の花散らくはいつく」の句をうけ、その散る花を惜しんで竹の林に鶯が鳴くと詠んだ。竹の林は竹林の七賢人の連想から超俗の境地において自然を樂しむ心境を歌ったものであろう。矚目の詠歌ではなく観念的な作である。③(八二五)に至ると三たび青柳が中心の素材としてあらわれる。そして前の二首が、梅花の散ることに想を寄せているに對し、ここで「梅の花咲きたる園」と現実に眼を向ける。前の歌が超俗の境地を観念的に歌っているに對し、青柳を覆して梅花の園に遊ばんとする現実的境地への転換を試みているのである。④(八二六)はそれをうけて、春風に靡く柳の糸と梅の花の風情はいずれが優れているとも劣っているとも定めがたいと、眼前の園の風情を歌い興趣をもりたてて結びとしている。ここで旅人の官邸の柳と、自宅の梅の花との風情を比較すると解するならば、いかにも間の抜けた発想になってしまう。ここの「わがやど」はやはり現在いる官邸の柳と梅花でなければならぬであろう。

このようにA群からC群まで各群の三首目に青柳を素材にした歌があることは、単なる偶然なのであろうか。A群三首目の粟田大夫の歌は、梅の咲く園に芽を出して覆にするようになった青柳に着目し、B群三首目笠沙弥の歌は青柳と梅花

とを挿頭にして酒を飲む春興に発展する。C群三首目小監土氏百村の歌は、栗田大夫の歌と同工異曲であるが、前者が單に矚目の歌であるに對し、後者はそれを蘊にして遊び暮らそうと云うて現實的に詩宴の春興をもりたてようとする主觀へと発展している。また万葉集中の

我が挿しし柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ（一〇・一八五六）

梅の花したり柳に折り雜へ花に供養ば君に逢はむかも（二〇・一九〇四）

大宰の時の梅花に追ひて和ふる新しき歌六首（中二首）——家持

春雨に萌えし楊か梅の花ともに後れぬ常のものかも（一七・三九〇二）

遊ぶ現の樂しき庭に梅柳折りかざしては思ひ無みかも（一七・三九〇五）

などの歌からみても、當時柳と梅とは並べて賞翫すべき春の景物であつたことがうかがえる。この詩宴において園の梅を主題に詠歌吟誦して四首一連の歌を連ねてゆき三首目で場面なり氣分を轉換する場合、園の中におそらくあつたであろう青柳を素材として取上げることが安易な方法であつたのであろう。三首目に青柳を詠むという約束ごとがあつたとまでは考えたくないが、栗田大夫が最初にそれを試みたに對し、笠沙弥と土氏百村は意識的に取上げ、さきに述べたように発展させていったものと考えたいのである。A群からC群に亘る三首目の青柳の歌は、漢詩の絶句の転句に相当するものとして意識的に詠まれ、各群の三首目の歌の間には有機的な連繋があるものと考ええる。しかも各群の第一首は、前の群の最後の歌と、付け合いによって連繋が保たれている。つづいてD群以下は如何に展開するか。

① 春されば木末隠りて鶯ぞ鳴きていぬなる梅の下枝に（八二七） 小典山氏若麿

② 人毎に折りかざしつゝ遊ぶともいやめづらしき梅の花かも（八二八） 大判事丹氏麿

## D

- ③ 梅の花咲きて散りなば桜花つぎて咲くべくなりにてあらずや (八二九) 葉師張氏福子  
 ④ 万世に年はきふとも梅の花絶ゆること無く咲き渡るべし (八三〇) 筑前介佐氏首

D群①(八二七)はC群の後半の二首が柳と梅とをおりませた春興に傾いてきたに對し、平凡ではあるが梅と鶯の春興を新たに詠む。②(八二八)はその梅の花のいよいよ愛すべき花であることを歌い、③(八二九)になると、今まで三首目が青柳を素材にしたのに對し、突然桜が素材として取上げられる。そして前の二首が梅を中心にした現実的な春興を歌っているに對し、つづいて桜も咲こうと春の季節の懽びといったものに転じているのである。このあたりになると「園の梅」を詠むという共同の目標から、かなりかけ離れたものになっている。④(八三〇)は前の歌が梅から桜への推移を詠んだに對し、梅は散って桜になろうとも、梅の花は年かわるごとに永久に咲きつぐであらうと、眼前に見る梅の花への傾倒の気持で結んでいる。

## E

- ① 春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜もいねなくに (八三一) 吉岐守板氏安麿  
 ② 梅の花折りてかざせる諸人はけふの間は楽しくあるべし (八三二) 神司荒氏稻布  
 ③ 年のはに春の来らばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ (八三三) 大令史野氏宿奈磨  
 ④ 梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来るらし (八三四) 小令史田氏肥人

E群の①(八三一)は前の群の最後の歌が永劫の時を詠んでいるのに對し、現実の春の一刻を捉え、梅の花を君と呼び、夜も眠られぬという精神的な梅への思慕を歌っている。それを承けて②(八三二)は諸人が梅を挿頭して遊ぶ現実の今日一日の楽しさを強調する。③(八三三)になると、前の二歌が精神的な梅への思慕あるいは春興であったのに對し、現実的な酒宴の快樂へと転じているのである。しかしA B C D各群の三首目におけるような素材の上での鮮やかな転換はみら

れない。④（八三四）は梅の花の満開に当って百鳥の声を聞く精神的な楽しさを歌っている点で、①の歌に照応しているように思われる。

F

- ①春さらばあはむと思ひし梅の花けふの遊にあひ見つるかも（八三五） 薬師高氏義通
- ②梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり（八三六） 陰陽師磯氏法磨
- ③春の野に鳴くや鶯なつつけむと吾が家の園に梅が花咲く（八三七） 宇師志氏大道
- ④梅の花散りまがひたる岡びには鶯鳴くも春かたまけて（八三八） 大隅目楳氏鉢磨

F群①（八三五）は梅の花を擬人化し今日の宴遊に梅の花にめぐり逢い得たよろこびを詠い、②（八三六）は梅の花を挿頭して遊ぶ今日の遊宴が、いくら楽しさを尽くしても尽しきれぬ気持を詠って遊宴を謳歌し、咏嘆している。さきのE群②（八三二）に照応しているところがある。F群の前の二歌が、「遊び」を中心に展開したに対し③（八三七）では陳腐ではあるが鶯を素材に取上げて転回を試みている。鶯を取上げて詠った歌は一連中既に（八二四）（八二七）の二首があるが、ここでは春の野に鳴く鶯を馴着けようとしてこの家の園に梅がきれいに咲いていると詠ったところは今までの歌にみられない新しい趣向がみられる。前二首が遊宴中心に傾いたのに対し、ここで一般的な鶯を素材にしつつ園の中の梅の花の美しさを引きだたものと考えたい。④（八三八）はその鶯が中心の素材になってしまったが、春らしいうらかな景の描写で結ばれている。しかし素材の上で第三首と重複し、内容的にも、結句としての機能がはっきりしない。

G

- ①春の野に霧立ちわたりふる雪と人に見るまで梅の花散る（八三九） 筑前目田氏直人
- ②春柳縵に折りし梅の花誰か浮べし盃の上に（八四〇） 壱岐目村氏彼方
- ③鶯の音聞くなべに梅の花吾家の園に咲きて散る見ゆ（八四一） 対馬目高氏老

(④) 吾やどの梅の下枝に遊びつゝ、鶯鳴くも散らまく惜しみ (八四二) 薩摩目高氏海人

G 群① (八三九) は春の野に降る雪と、散る梅の花とを対比し、譬喩しているのであるが、園中の情景かどうか、印象も鮮明でないし類型に陥っている。② (八四〇) はさきに春柳を枕詞と見る説、一、二句と、三、四句を対句に見る説のあることを述べたが、ここではやはり春柳を護の枕詞とし護に折った梅の花を誰が盃の上に浮かべたのであろうかとみる方が自然で素直である。第一首とのつづき具合は分明でないが、園中の梅花の散る風趣をうけて、長閑な酒宴の中の興趣をよんだものであろう。それに対し、③ (八四一) は再び鶯の声を詠んで、その声を聞く折しも梅の花の散る長閑な春興に転じたものである。④ (八四二) は前の鶯を再び詠み景と情を合わせ歌って結びとしている。しかしこれもF群と同様に、結びとしての機能が明確でない。

## H

- ① 梅の花折りかざしつゝ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ (八四三) 土師氏御通  
② 妹が家に雪かも零ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも (八四五) 小野氏国堅  
③ 鶯の待ちかてにせし梅の花散らずありこそ思ふ子がため (八四五) 筑前椽門氏石足  
④ 霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも (八四六) 小野氏淡理

H 群① (八四三) は梅を挿頭して遊ぶ今日の集いから「も、しきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここにつどへる」の歌の境地をしのぶ気持を表現したものであろう。筑紫における今日の雅宴が都におけるみやびに通ずるものがあるところから、このような連想が湧きおこったのであろう。② (八四四) の妹が家についてはいろいろの意見があり、万葉集注釈(澤瀉博士)では、A 群④の憶良の作のところで、「『妹が家に』の如き作もあって、必ずしもその日その場の作と限らないわけであるから、この憶良の作も『録旧作』といふやうなものであってもよく、単に『詠梅花』といふ題詠であって



もよい」と、三十二首一連の根本的作歌目的に触れておられる。即ち結局題詠であるから妹が家の梅の花が詠まれても差支えないということである。これに対して吉永登氏は、飽くまで官邸における梅花を詠む態度を堅持するところか、

妹が家に伊久里の森の藤の花今来む春も常かくし見む（一七・三九五二）

〔妹が家にいく〕

伊久里

この例によって妹が家を枕詞とする。しかし第一首で都をしのんでいる気持を受けて、目前に散る梅の花から都に残して来た妹の家、そこにかつて雪の降るのを眺めたことのある家、その時の雪を想起しているものと考えられないであろうか。

過去の追想と、目前の景観とが二重映像として重り合ったものとみたいのである。小野氏国堅は万葉集全注釈によれば、

小野国方で東大寺の写経所の令史となった人、「天平十年七月六日史生元位小野国方（写経同等公文―大日本古文書二十四ノ六三）とあり、都とも関係の深い人である。天平二年の頃はまだ若く資人でもあったのだろう。梅の花の散るのを見て、しかも第一首の都への連想の歌から都の妹の家へ連想が及んだとしても何の不自然もないことである。③（八四五）

は前の二歌が現実を離れて、都へ或は都の妹の家へ連想が及んだのに対し、鶯と梅との取り合わせによって、再び現実場面を引き戻している。鶯がまちかまえていた梅、せつかく咲いた梅、鶯のために散らずにいてくれと、現実の梅の花を詠歌しようとしたものである。「思ふ子」は全釈、新考では「私の思ふ人」「思ふ女」とそれぞれ解しているが、ここでは歌の調子から考えれば鶯を指すのが自然であろう。④（八二八）はさきの大判事丹氏麻呂の歌（八二八）と

霞立ち春の長日を奥処なく知らぬ山道を恋ひつつか来む（二二・三一五〇）

の歌を合わせたようなところがあるが前の「散らずありこそ」に照応させて「いやなつかしき梅の花かも」と結んでいる

だけでなく、三十二首冒頭の歌（八一五）の「梅ををきつゝ、楽しき終へめ」にも照応して、梅の花を讃美して詠みおさめているのである。平凡な作ではあるが、相当の手腕とみてよいように思う。

以上みてきたように、D群E群の第三首はそれぞれ桜、酒宴といった素材で転換を試みている。しかしE群は転句としての効果もすくないし、四首一連の緊密性も弱いことは認められる。F G H群の第三首は共通して「鶯と梅」の取り合わせによって興趣の転換を試みようとしている。しかもF群の第三首は、鶯を手なづけようとして梅の花が精いっぱいに咲いている矚目の景を詠い、G群の第三首は、鶯の声を聞くようになると園の梅の花も散ってくるという、鶯と梅花は春輿の中に融和してくる。H群の第三首は鶯の待ちかまえていた梅花が散らず永遠に咲きつくことを願うのである。即ちこの三群の第三首は、季節の進展、永却への願いという点で連繋があると思うのである。さきにも触れたように、E F G群には、起承転結の連繋の上で、不完全なものはあるとしても、D群以下はやはり四首一連、絶句形式の意識によって述べねられたものと推定したいのである。

#### 後に追ひて和ふる梅の歌四首

残りたる雪に交れる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも（八四九）

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも（八五〇）

わが宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも（八五一）

梅の花夢に語らく風流たる花と吾念ふ酒に浮べこそ（八五二）

この梅花宴の追和の歌を旅人の作とする説（注釈）憶良の作とする説（私注）一人ずつの連作で作者は女性、最後の歌は坂上郎女作とする説（土居光畑）などいろいろの説はあるが、これなども四首一連で前二歌は雪に交り咲く梅の花の讃美であ

る。第三首で散る花に転じ、最後でその散る花を夢に託し、酒に浮べる風流をうたっているものとみられる。

#### 書殿に餞酒せし日の倭歌四首

天飛ぶや鳥にもがもや京まで送り申して飛び帰るもの（八七六）

人もねのうらぶれ居るに立田山御馬近づかば忘らしなむか（八七七）

言ひつつも後こそ知らめとのしくもさぶしけめやも君坐さずして（八七八）

万代にいまし給ひて天の下奏し給はね朝廷<sup>うゑ</sup>去らずて（八七九）

大宰府官邸の図書室で、旅人が京に上るに当って催した送別の宴の歌であるが、これも四首一連になっている。次の「敢へて私の懷を布ぶる歌三首」のあとの左注までを同時の作と見れば、この四首は当然憶良の作と考えなければならぬ。即ち憶良一人で四首単位に歌ったものである。四首一連中前二首は空想的で、都中心に詠まれているに對し、三首目は「言ひつつも後こそ知らめ」と現実に戻って、旅人帰京後の筑紫における人々の寂しさに転じ、最後に長寿を保って政治をとるようにと祝福の歌で結んでいる。これらの例も絶句形式に倣ったものと考えられないであろうか。題詞に倭歌とあるのも漢詩を意識においたものであることは明らかなことである。この他巻五には「僕報ふる詩詠に曰はく」（八一）「答ふる詩に曰はく」（八五四）「……去り易く留まり難きを悲み嘆く詩一首」（八九七）などの使用例も見られる。これらも短歌と漢詩の同化を意図するものと思うのであるが、短歌と漢詩をただ名称の上だけでなく、型態の異なるものを同化せしめるためには、四首一連の絶句形式に倣わざるを得なかったのではなからうか。当時旅人や憶良を中心にして、絶句形式に倣って四首一連を一つの単位として、思考感動を纏める方法が行なわれていたものと考えerことはいかなうか。であろうか。

この仮説にたつて考へるとき三十二名の歌人の配列は最初から意識的に官位順に並べて、上位の方から四人ずつに区切つて誦詠が行なわれたものと考へなくてはならない。これは土居光知氏の連歌の付け合ひを考へる場合も同じことである。ただH群の筑前掾門氏石足は、官位からいへば、G群の筑前目田氏直人の前に入らなければならない人物であるが、これは万葉集全註釈でも触れているように、当日の幹事、世話役などをしていたため、大宰府の賓人たちの群に入つたものと思へることが妥当であろう。なお四首八群の意識のもとに歌が連ねられたものとすれば、三十二名揃える点で、お相伴役以下の人選の上でかなり作為があつたことも考へられることである。

最後に、さきに触れたわが家の園 わが園 わが宿の問題について考へなければならない。万葉集中、宴席で客人が主人の家を詠んだ例をみると、

正税帳使掾久米朝臣広繩、事畢りて任に退り、適越前国の掾大伴宿弥地主の館に遇ひ、よりて共に飲<sup>うたげ</sup>樂す。時に久米朝臣広繩の、萩の花を囑て作る歌一首

君が家に植ゑたる萩の初花を折りて挿頭さな旅別るどち（一九・四二五二）

（天平宝亨二年）二月式部大輔中臣清麿の宅に宴する歌十五首（中一首）

君が家の池の白波磯に寄せしばしば見とも飽かむ君かも（二〇・四五〇三）

右の一首は中弁大伴宿弥家持のなり。

（天平勝宝三年）十月二十二日、左大弁紀飯麿朝臣の家にして宴する歌三首（中一首）

十月時雨の常かわが背子が屋戸の黄葉散りぬべく見ゆ（一九・四二五九）

右の一首は、少納言大伴宿弥家持、当時梨の黄葉を囑て此の歌作れり

〔天平勝宝五年〕二月十九日、左大臣橘の家の宴にして、攀ち折れる柳の條を見る歌一首

青柳の上枝攀ち取り縊くは君が屋戸にし千年寿ぐとも（一九・四二八九）

〔天平勝宝七年〕五月九日、兵部少輔大伴宿弥家持の宅に集飲する歌四首（中二首）

わが背子が屋戸の石竹花日並べて雨は降れども色も変らず（二〇・四四四二）

右の一首は大原真人今城のなり。

わが背子が屋戸なる萩の花咲かむ秋の夕はわれを偲ばせ（四四四四）

右の一首は大原真人今城のなり。

などのように君が家、君が屋戸、わが背子が屋戸と詠んでいるのである。そして以上の諸例は一応宴席の文学の遊びの場で詠まれたものであることに間違はない。しかし梅花の宴の三十二首の場合と多少の差異があると思うのである。即ちここに引用した宴席の歌は一人一人が一首自由な立場で詠詠している。「式部大輔中臣清麿の宅に宴する歌十五首」においては、梅の花、常磐の松、高円の野、或は主人の長寿を祈念するというように各人各様、自由な立場で主題が選ばれているのである。それに対して、大宰府官邸に於ける遊宴の場合は、三十二名の歌人には「賦園梅」という共通の目標があった。そしてその場合、「園の梅」は題詠の題目というよりは、三十二名の歌人の共有する一つの景物と考えられたものはなかろうか。その上落梅篇に劣らぬ作品を共同で創り出そうという、四首一連絶句形式単位の作品を完成するという共同目標があった。その目標の前には、囑目の園の梅は誰の所有という觀念は消失したものと考えたいのである。官邸の園のなかの、梅を含む風景は既に三十二名共有の自然の景であり、各自がわがものと観じ得たのであろう。そして三十二名

の者は、ひたすらに雅宴の興趣を盛りたてようと協力し合ったのである。官邸という觀念を乗り越えて、園の中の梅を、わが家の、わが宿の梅と観ずるところに、「文学の遊び」が発現しているものと考えたい。また一面「文学の遊び」に徹していたからこそ、矚目の景ばかりでなく、都への連想、過去への連想、自分の境遇への連想、時には園中からやや逸脱したような情景も詠める自由な雰囲気醸し出されたものではなからうか。またそこに、普通ならば礼を失するようなわが家の園　わが園　わが宿という表現が用いられることも許されたものではないかと思うのである。

以上のような考えから、「わが」というのはいずれも官邸を指すものであり、「此の家」というくらしいの意味に解する点で、万葉集私注の説に従いたいのである。（四三・九・二三）

注1 「歴史における芸術と社会」（みすゞ書房）所収『万葉集における「みやび」の発現について』

注2 「国語研究」第二十八号（昭和三三・四）所収『梅花の歌』

注3 枕詞とする説は万葉集注釈（澤瀉博士）などであり、対句とする説は万葉集私注などである。

注4 「万葉」第六十六号（四三・二）所収『梅花の歌三十二首に見える「我」について』以下同氏の論説引用の箇所はこれに同じ。

注5 本論引用の部分に次の文がつく。

「ことにお相伴と見るより接待役として主人側に立っておれば『我が園』などがそのまま旅人官邸のそれを意味することになってもそんなに不自然ではないのではなからうか。純粹の接待役ではなかったとしても、それらの人たちが自らを卑下して接待役として立ちふるまったと解すること、もとより自由である。……身分の低い役人や地方から公務を帯びて大宰府に集った小役人たちは、いずれも長官の官邸の長屋などを用いたのではないだろうか。そこにも『我が園』などということに対するかわりらしいものが考えられないでもない。」

注6 「万葉」第五十七号（四〇・一〇）所収『梅花歌三十二首の成立事情』

注7 「古代伝説と文学」（岩波書店）所収『万葉集卷五について』以下同氏の論説引用の箇所はこれに同じ。